

多宝院は、仏教の禅宗の最大宗派である曹洞宗の寺である。寺は 1489 年に茨城県に建立され、何十年にもわたり多賀谷家の菩提寺として利用されてきた。1602 年、佐竹義宣（1570～1633）が久保田藩（現秋田県）の大名になったとき、彼の家臣や支持者の多くが同行した。多賀谷家は結婚と忠誠によって佐竹家と結びつき、菩提寺と共に久保田に移ってきた。1610 年、檜山城のすぐ下に多宝院が再建されたが、1771 年に現在の場所に再び移された。

正門の山門は比較的シンプルなデザインで、多賀谷家の階級としては少し珍しいものである。歴史家たちによると、これは江戸時代（1603～1867）に施行された徳川幕府の「参勤交代」政策によって引き起こされた財政難を表すものと例証している。この政策により、大名と多賀谷家の家臣は自分の藩と首都の江戸（現在の東京）に交互に住むことが命じられた。二か所の住居を維持し、江戸との間を大名行列で往来する儀式を行うことは、大名にとって絶え間ない出費であった。寺に残る記録によると、多賀谷家は、多宝院建設の資金集めのために、地元住民の協力を求めたという。

本堂は 1771 年に再建され、慈悲の菩薩である観音菩薩が祀られている。また、多宝院での宗教的慣習は、神道的な側面も受け継いでいる。1868 年に明治新政府が全国的に 2 つの宗教を強制的に分離するまで、仏教崇拜と神道崇拜の融合は、神社や寺において一般的であった。今日では、多宝院のような神仏混淆の施設は比較的珍しい。

寺のその他の注目すべき特徴は、本堂の天井にある大きな円形の龍の絵と、正面通路の「鶯張りの床」である。この木の床は、侵入者が忍び足で歩いても大きな音がするように設計されている。

寺の敷地には大きなしだれ桜が立ち並び、花見と呼ばれる春の桜を鑑賞する人気の場所である。